

MOZA MOZA FICTION

僕はたいした理由もなく君の手を握る

あらすじ /SYNOPSIS

ある日変身中の魔法少女が、何者かによって殺害される事件が起こり。それをきっかけに魔法少女たちのなかで血で血を洗う泥沼の抗争が始まっていた。

そんな中で、魔術学舎の学生だった、アリサとエレナも召集されることになり、組織所属の魔法少女として戦闘に参加する事となる。

時を同じくして、使い魔の仕事に嫌気がさし放浪していたカルナは魔法少女の戦闘に民間人として巻き込まれる、その中で少女コーディリアと出会い、瀕死だった彼女を救う為、魔法少女契約をし彼は彼女の使い魔となる事を選ぶ。

年端もいかない者たちが様々な思いを胸に、それぞれが戦いに身を投じ、傷つき、疲弊し、命を散らしていく。

魔法少女と使い魔、二つの視点から描く魔法少女抗争の一端。

そして、残されたものの苦い痛みと苦しみ。

——私はあなたに寄り添ってあげられたらどうか？

二つの物語が交差する。

魔法少女ハードボイルド『守護者たち』シリーズ前日譚。

Books By
MOZA MOZA FICTION

私には得ることの出来ない何か
長い夜に降る雪
守護者たち
見知らぬ者たちの夜
僕はたいした理由もなく君の手を握る

僕はたいした 理由もなく 君の手を握る

I have held your hand for reasons not at all

ロナルド始^{しざわ}澤

表紙イラスト
あちゆみ^{あん}み杏仁

MOZA MOZA
モザモザ

A MOZA MOZA FICTION
A Division of DōJIN CIRCLE MOZA MOZA

僕はたいした理由もなく君の手を握る

Boku wa taishita riyû mo naku kimi no te wo nigiru: I have held your hand for reasons not at all

By Ronald SHIZAWA

A DÔJIN-SHI Original

THIS DÔJIN-SHI EDITION Copyright © 2014 Ronald SHIZAWA, MOZA MOZA

Text Copyright © 2014 Ronald SHIZAWA All right reserved

Cover Illustration Copyright © 2014 Atyumi Annin (CIRCLE: ATYUMI TEIKOKU)

発行履歴

PUBLISHING HISTORY

同人誌版 平成二十六年 五月

FIRST DÔJIN-SHI EDITION, Trade paperback Format, May 2014

By MOZA MOZA FICTION

発行者覚書

PUBLISHER'S NOTE

本作はフィクションであり、名称、人物、場所、事件及び出来事等、現実の事象を扱っているもの以外は作者の想像力によるものであり、事件、地名、類似する人物の生死など、実在の事物との類似及び一致は、現実の事象とは全くの無関係です。本書を転載、利用する際は、形式、方式を問わず、同人サークル MOZA MOZA にお尋ねください。

This is a work of fiction. Names, Characters, places, and incidents either are the product of the author's imagination or are used fictitiously. Any resemblance to actual persons, living or dead, events or locales entirely coincidental.

No part of this book may be reproduced or utilized in any form or any means, electronic or mechanical, including photocopying, recording or by any information storage or retrieval system, without permission in writing form the publisher. Inquiries should be addressed to DÔJIN CIRCLE MOZA MOZA.

同人サークル MOZA MOZA

代表：始澤 遼介（筆名：ロナルド 始澤）

DÔJIN CIRCLE MOZA MOZA

Circle President: Ryôsuke SHIZAWA (Pen name: Ronald SHIZAWA)

[URL]

<http://www9.ocn.ne.jp/~r-shiza/>

[E-Mail]

ronald.s.mozamoz@gmail.com

表画：あちゆみ 杏仁（あちゆみ帝國）

Cover Art by Atyumi Annin (CIRCLE: ATYUMI TEIKOKU)

[BLOG]

<http://eatyu.blog99.fc2.com/>

[E-Mail]

a.atyumi@gmail.com

本文フォント：リュウミン（漢字） リュウミンオールドがな（かな）

TYPESET in 10pt Ryûmin (KANJI) Ryûmin Old Gana (KANA)

Printed and Bound in Japan by Shimaya Shuppan: Shimaya Printing co.

FIRST EDITON

10987654321

僕はたいした理由もなく君の手を握る

主要登場人物

MAIN CHARACTERS IN THE STORY

アリサ	魔法少女
Arisa	コードネーム 『 ^{ファントム ブルー} Fantôme bleu』
エレナ（レーニャ）	魔法少女 コードネーム 『 ^{あか} 紅い
Erena（renya）	魔女（ ^{クラスナイ ヴェヂマ} Красный ведьма）』
シチレー（シジレスレン）	アリサの友人
Shichire（Shijiresuren）	魔法少女
カルナ	使い魔
Karuna	
ミハイル（ミーシャ）	カルナの友人
Mikhail（Misha）	使い魔
コーディリア	魔法少女
Cordelia	
チャンディカ	使い魔
Chandika	

第一章 CHAPTER 1

運

命は変えることが出来ない。たとえどんなにあがこうとも……。それは過ぎ去ってしまった日々と同じ

で、戻ることはないのだ。

昔の話をしよう。

私はその頃、とても寒い所にいた。そこに私の学び舎あつたからだ。

魔術学舎と呼ばれる寄宿学校。

学生からは単純に『学舎』とか、『冬の監獄』などと呼ばれていた。

学舎は古く、建物自体のデザインは荘厳だが外壁が剥がれて煉瓦がむき出しになっていた。歴史ある教育機関で学術的にもそれなりのレベルの所なのだが、物資不足で補修もままならない。

その理由は、ある事件がきっかけだった。

変身中の魔法少女が何者かに魔術狙撃され殺された。犯人は未だ見つからず皆が疑心暗鬼に陥っていた。

さらに、協会・組合と呼ばれる魔法少女が所属する二大組織による対立の様相まで示し始め、縄張り争いの関係上、もともと水面下で対立していた両組織だったのだが、今回の事件のせいで燦^{くす}ぶっていた今までの不満が一気に噴出し険悪な様相となっている。

組織対立は日に日に激化して、両組織に報復行為とも取れる破壊活動が頻発するようになった。

血で血を洗う抗争。

臨戦態勢。

有事独特の閉塞感^{へいそく}。

それは冬の監獄の学生たちにも暗い影を落としていた。

大半の学生は寮生活。私も、ある一人の女の子と同じ部屋で一緒に生活していた。

真っ赤に燃える炎のように赤い髪。魔法女の伝承そのままに炎を宿した瞳。

表情はどこか鋭く、それでいて綺麗だった。

その風貌^{ふうぼう}から彼女はこう呼ばれていた。

クラスナイヴ エヂマ
Kuchinichi Bejima——紅い魔法女^{あかまじよ}——と。

彼女は、学舎でも飛びぬけて優れた人物だった。特待

生扱いも領ける才能と、確かな技術を持っていた。

こういうのを天賦^{てんぷ}の才というのだろう。

傍^{はた}から見たら、欠点が一切見えない。ほとんど完璧と言つてよかった。

彼女の名前はエレナと言った。外見の美しさに加え、身のこなしも上品だった。

わたしなんか彼女と比べると、幽霊か悪霊^{たぐい}の類に分類されそうだ。

深淵^{しんえん}な闇のように長い黒髪。

切れ長の目。

おまけに喜怒哀楽を表に余りださないの、それらから感じる印象の為に時々、にらんでいると誤解されることもある。東洋の血を引く見た目を除けば、私は二つ名も持たない一人の女に過ぎなかった。

何の因果かわからないが、ある時、私は彼女と同室になった。

それまで、一切エレナとは、接点がなかったのだが、いざ一緒に生活してみると気さくで話しやすく、気も合いい、昔からの友人の様に仲良くなった。

なかなかそういう出会いは無いものだがゼロではな

い。彼女も運命の巡り合わせの中の一人だった。

エレナは私に愛称のレーニヤと呼ぶようにと言った。そっちの方が自分らしい響きなのだと聞いた。

別に断る理由は無かった。

特別な場合をのぞいて私はそれからエレナの事をレーニヤと呼ぶようになった。

「ああっ、ムカつく」

「どうしたのよ、アリサ」彼女は私を嗜める。

相変わらず彼女が私の名前を言う時のアクセントは少し間延びしていて、更に最初のアの音を強めな巻き舌風に発音するのでRのような音に時々聞こえる事がある。おまけにアリサのりの部分の母音を延ばすのでラーリサともアリーサとも聞こえる。それが彼女の母語の癖らしい。最初は違和感があったがこれでも以前よりかは整ってきている。時々は違和感のない発音をするようになってはいはいる。

私を嗜めるエレナに、事の顛末を説明した。

「今日もロクでもない男どもに言い寄られた、何が、君

の黒い髪はエキゾチックだ！アイツら人の外見しか見てないのか!」

「あら、私もあなたの髪好きよ」エレナはそういうと近づいてきて私の髪を優しくなでる。

私は急に頬が温くなった。

「レーニヤ。そういう意味じゃなくて……もう……」

そのあとは何も言葉が浮かばなかった。

彼女が言った言葉はからかいではない偽りのない本意。

だから、彼女の言葉は私の心に鋭く突き刺さるように響いた。

どこか見透かされている感じがして調子が狂う。

何故だかわからないが、彼女のの前では余計な感情が削ぎ落とされる感じがした。

そんなことを知ってか知らずか「カワイイなあ。アリサは」と言いながらエレナはじゃれてくる。「アリサもさ、いちいち気にしない方がいいよ。あからさまに危害が加わるような危険を感じてるならともかく、特定の人間に一方的に^{よま}迫られている訳でもないんでしょ？ こんなご時世だし、みんなピリピリしてるのをどうにか誤魔化^{ごまか}し

たくてこういうとしてるわけだしさ」

「状況は日に日に悪くなってる」

「ここもしばらくすれば、召集令状の束がやってくるはず。私も、縄張り争いに興味はないんだけどね」

「ここも聖域ってわけじゃないからね、下手したら学者の学生・研究者、教師丸ごと戦場に送られる可能性もゼロじゃない」

外は戦場だった。

比喩ではない。

実際そうなのだ。

ここ数か月で協会と組合と呼ばれる二つの組織の抗争が更に争いを呼んで、武力紛争のような状態になって収拾がつかなくなっている。日々戦渦は拡大し、街には戦意高揚のスローガンが至る所に様々な言語で見受けられていた。

『アストラニー』と呼ばれるこの世界は、魔法と言われる能力を持ったいわゆる『異端』とされた者たちが、力を持たない者たちから迫害され、さまよいたどり着いた空間だ。

大元の語源は『風変わりな』とか『奇妙な』という意

味の言葉。

長い時間を経て音が変化しアストラニーとなり意味は転じ『異なる世界』つまり、『異界』という意味の独自の言葉となった。

アストラニー自体は、多民族社会であり、言葉に関してはそれぞれの地域に住みついた移住者の元々の言語が話されている。

ただ特殊な空間であり、魔術的な力が発動しているのか他言語同士の会話をしても、おおよその意味が通じてしまう。言語的な差異のせいで、少し会話として歪な部分もあるが、日常生活は問題ない。

中には体質で魔術に対する能力が弱く、その恩恵を受けられない人もいる。ただ、そういった人たちの大半は生まれたコミュニティ内の言語圏内だけで生活していることが多いようだ。

それ以外にも、技術や知識の伝承の関係である程度のレベルまでコミュニティを固めている保守的な面もあることはあるが、全体的には流動的な方だ。

また、魔力は男性よりも女性に遺伝するらしく、魔術労働に関しては女性の比率が高い。男性もいないわけで

はないが少数派だ。

戦渦の影響は学舎の方にはまだ少ないが、雲行きは怪しかった。カリキュラムは日に日に戦闘訓練のコマが増えていつている。

エレナはそんな状況もどこ吹く風で、普段は学舎から与えられた工房に籠りつきりだ。彼女は特待生扱いで、大半の授業は免除されている。その替わり実験と研究に加え、鬼のような量のレポートと定期的な学会での研究発表を課せられていた。

時々、寝室で横になっていると、パーテーションで区切られたダイニング・キッチンの方から真夜中も何かをタイプする音が聞こえたりする事もある。

その為、食事の準備や部屋の掃除は私の担当だ。家事労働は嫌いではないし、自分の性に合っていることもある。自分の性に合っていることもあり、部屋で仕事の分担はすんなりと決まったのだ。

まだ周囲は青に染まっていて、外は冷え切っていた。もそもそとベッドからエレナが起きてくる

視点の定まっていない表情。

「また夜更かししてたの？ ごはん出来てるよ」
挨拶より先にそんな言葉が私の口から出た。

エレナは頷き、テーブルに着いた。

皿の上には小さなパンケーキ。生地の中にチーズが練り込まれているため、焼き上がったパンケーキからなんとも言えない良い香りが鼻腔をくすぐる。

サワークリームとジャムを添えて、皿をテーブルの上に乗せた。

それにサモワールと呼ばれる湯沸しとポットが合体したような、器具で要れた紅茶が朝食のメニューだ。

テーブルに着くと私は小さなグラスに濃いお茶を注いでから、サモワールについた蛇口で熱湯を注いで茶を好みの濃さに薄めた。

私はスプーンで掬った蜂蜜を口^{はちみつ}に含みお茶を口に流し込んだ。それがこの地域のスタイル。

幾分奇妙にも思える飲み方だが、慣れた。

向かい合って朝食をとっていると、エレナはつらそうにあくびをかみ殺しながらパンケーキにジャムを塗っていた。

「根を詰めると身体壊すよ？」

「わかってる。でも、これだけは今のうちに終わらせたい」

私は溜息をついた。

エレナは、気まづそうに作り笑いをしていた。私は余計なことは言わなかった。

朝食を終えるとエレナは手際よく身支度を整え、巨大な革張りのハードカバーの本と書類の束を抱え、さっそうと部屋を出て行った。さすがに学舎に向かう時間になると、目覚めとはうって変わって身のこなしが優雅である。

私も食器を片づけ、そのあと洗面所で鏡とにらめっこしてから授業の準備をして、部屋を後にした。

第二章

CHAPTER 2

「バ

カだね」俺の目の前にいたクソババアは、俺の経歴書を見て、そうほざいた。おまけに俺の目の前で煙草たばこを吸い始め、その煙を俺に吹きかけた「ア
ンタみたいに学位までおさめてまで、こんなところにく
るんだから」

アンタだって似たようなもんだろ。と俺は心の中で
思ったが、口には出さなかった。

面接の前に、面接官の情報は仕入れてきていた。聞か
れれば、表に出ている経歴なら空で言える。

要約すれば一昔前は……

良い所出でのお嬢様。

かなりのインテリ。

パイオニア。

彼女はこの地位を手に入れるために奮闘ふんとうし、地位を得
た。今では高そうなソファアにふんぞり返っている。

軽蔑されることはあっても尊敬されることはない。

プライドとプロフェッショナルな意識は高いのだろう
が、見ていて、プロはこうあるべきだという意識を周囲
に押し付けている傾向が見て取れた。

俺の短い人生の中で理解したのは、

本当に苦勞して成り上がった奴は性格が恐ろしく歪ゆがむという事だった。

というよりも、しなくてもいい余計な苦勞をした奴が歪むのかもしれない。『若いうちの苦勞は買ってでもしろ』なんて諺ことわざもあるが、そんなのは嘘だ。

余計な苦勞をしてしまった見本が目の前にある。苦勞した割に経歴はともかく実績はそれほどでもない。

目の前にいるのは、プライドだけ高く、口の悪くて性格も残念な、醜いババアだ。

面接とは名ばかりの面通し。

まともな仕事は狭き門。

結局は、醜しゅうわく悪な魔女にカエルの姿にされることを選んではまった。つまり、魔法少女の使い魔。それも、使い捨ての派遣業務。

面通しが終わって一息ついていると、

「やってられないよな」と言つて、煙草を口に咥えながら、そいつは俺に笑いかけてきた。

「ああ」

何となく、気が合うような気がした。

「ミハイルだ」

「カルナ」俺は答えた

「お前も吸うか？」

そうやって、ソフトパックの口から、煙草を一本取り出した。

パッケージには、羽飾りの付いた民族衣装を身に着けパイプを吸っている男の絵が描かれ、メディスン・マンという文字が躍っていた。それが、この煙草の銘柄めいがららしかった。見たところ只の煙草だが、名前だけは体によさそうだった。

まあ、体にいい煙草などありはしないが……。

「結構」

「こんなところじゃ、たばこの一本や二本吸ってないとやってられないぜ」

「確かな……」

「起きて目を見開いたところで、全てを見ることはできない。だから我らは眠り、夢を見る」

「何だ突然」

「パッケージ裏に書いてあった」

ミハイルはそう言うのと、ソフトパックに入った煙草のパッケージを俺に見せる。

「気が変わった、一本もらっていいか」

「ああ、どうぞ」ミハイルはパックを軽く振り煙草を一本、パックの口から出し俺の方に向けた。

煙草を受け取ると「まさか、吸ったら、元の場所に帰れない奴じゃないよな？」と俺は言った。

ミハイルにやりと笑い。「それは自分で確かめろ。吸うも吸わないも、決めるのは自分自身。吸ってからは、俺でもさすがに責任は負えない。怪しむなら吸わなければいい。俺は強制はしない」

俺はミハイルの言い方が気に入って笑いながら、煙草を口に咥えた。

ミハイルに火をつけてもらうと、ゆっくり煙を吸い込んだ。慣れていないので肺の中までは吸い込まず、口の中でふかすだけにした。それでも煙は自分の方から体の方に勝手に入っていった。

重く、粘っこい煙が口の中から体の中に、泥のように沈んでいくような気がした。

煙が口腔内に満たされる頃には、

意識は朦朧とし、

思考は空回りし始める。

頭の中に思考の断片が現れては消える。まるでソーダ水の泡のように。

身体がほぐれるような開放感の後、脱力感のようなものを覚えた。

俺は煙を吐き出し、指に煙草を挟む。顔をしかめながら火の付いたタバコを確認する。

「強いな。これ本当に煙草か？」と聞いた。

俺はまだ、どこかぼんやりと、視点が定まらないような、変な気分が残ったままだったが我を失うほどではなかった。

「吸うのをやめてしばらくすれば、元に戻るさ」

そのあと話したのはあいさつ程度の事務的な会話だった。

仲良くなるのに余計な言葉はいらない。

その後も俺とミハイルとは長く付き合うことになる。

数日後

「あいつら、世の中を知らなすぎる癖に、想像で世の中は辛いことばかりだとか言いやがる、世の中ここよりも何倍も楽で、相対的に考えればマシな仕事は山ほどあるってのに……」

「話通じないし、おまけに頭も相対的に悪い」

「期待するのがバカなんだろうな」

ミハイルはハハッと笑い「そうだな」と言った「俺は、どうもあいつらに好かれてないみたいだからな」

小動物やヌイグルミの格好から解放される仕事終わりは愚痴の言い合いだった。正式な魔法少女の主従契約ではなく時間契約。

管理も魔法少女側からではなく、使い魔崩れが管理している。

面倒くさい仕事を押し付けたり、トラブルの尻拭いの毎日。年功序列に加え常識なんてものはあつてないようなものだった。

それでも仕事さえ終われば、元の身体に戻る。それだけは救いだらう。

確かに魔法少女に危害を加えないために使い魔はヌイ

グルミや小動物の姿になるのは理にかなっていていると思えるが、その代わり使い魔側の負担が多い。普通使い魔契約は両者の信頼と同意があつて成立するものだからだ。

毎日の理不尽な扱いに、二人とも参っていた。我慢すればするほど、上の奴等はつけ上がり、反抗すれば仕返しされる。

最後の方は精神的におかしくなっていた気がする。

結局、この仕事は長くは続かなかつた。俺はすぐに辞める決意を固めその旨を伝えた。

こじれた。

訳の判らない儀式めいた洗礼を受ける。

罵倒、暴力、当てつけ。詳細を話そうとすれば一日じゃ足りないくらいだ。

全てを清算し終えた時には肉体的、精神的にも参ってしまった。逃げようとすれば逃げたのだろうが、まともな判断力は残っていなかった。

結局体と心はボロボロになって、何もする気力もなくなってしまう、しばらくの間、貧乏生活をしながら細々と生活することになった。

復讐心やら反骨精神なんて、これっぽっちもわかなかった。とりあえず、逃げたいその気持ちがいっぱいで余計なことは考えたくもなかった。理不尽がまかり通るのは許せなかったが、自分でどうこう出来る問題でもない。

おかげでしばらく鬱を感じながら生きることになってしまった。

染みついたネガティブ思考はそう簡単に取れるわけではない。

見えない何かに怯える生活。

またその場しのぎの生活に身を投じ、どうにか生きていた。

金はなかったが時間だけは沢山あった。

何もない場所を俺は歩いてた。街から遠く離れた見知らぬ土地。行く場所も定めず思いつくままに自然の中を進み続ける。どうなるわけでもないとは分かっていたが、こういうことは思いついた時に、思い切つてやらないと足を運ぶことも無い。

原始魔術が伝わるコミュニティがあるという噂を人伝えに昔聞いただけだったのだが。思い立って、ここまで来てしまった。昔のうる覚えの噂を頼りにここまで来たのだが、そんなものはとつくの昔に無くなってしまったようだ。

見知らぬ場所^{さまよ}で彷徨い果てるのもまた運命だ。

静寂^{せいじやく}に耳を傾け、時に歩き、時に休む。

乾いた風と砂ぼこりの舞う赤い大地。日に照らされながら歩いていると小さな小屋を見つけた。木で出来た骨組みに枯草^{かれくさ}をかぶせただけの簡素な造り。

ずっと、放置されているわけではなく、定期的に手入れがされているようだった。入口まで行つて、誰かいるか尋ねた。

中には老人が一人住んでいた。

挨拶^{あいさつ}のあと「日差しが強いので、しばらくここで休ませてください」とお願いをした。

「かまわない。ゆっくりしていきなさい。この先は集落もしばらくは無いはずだ」

そう言いながら老人は長い変わった形のパイプを咥^{くわ}えふかふかと煙を燻^{くも}らせていた。

「吸うか？」

「結構です」

「旅人か？」

「はい」

「これでも飲みなさい。葉草を煎じた茶だ」老人はそういうと陶器で出来た取っ手のないシンプルなカップの中に茶色い透明な液体をそそぎ、俺の前に置いた。

それをありがたく受け取り、茶を啜った。香ばしい香りが鼻の奥を刺激し、するりと、消えてしまったかのようのどを通り抜けて行つた。

「なぜ、こんな殺風景なところに？」

「魔術の源流をたどりに——いや、どっちかという何かに引き寄せられた気がする。何というか、自分でもわからない。気づいたら足を運んでいた。ここに来たら何かがわかるような気がして」

「ほう。それで、何かを感じ取れたか？」

「さあ？」

俺の答えに老人は笑っていた。

老人の様子から、おれは悪くない回答をしたらしいと悟った。

「自然は力を有している。私たちが魔力と呼んでいる物の大元も自然の力だお前はその偉大なる力に導かれたんだよ」老人は笑った。「少し話をしよう。くつろいでくれてかまわない」

俺は頷いた。しばらくして老人は話し始めた。

「始まりの時、万物には何の違いもなかった。私たちが魔法や魔術と呼んでいる力は、万物に何の違いもない時の名残だ。だから願えば、力の大小あれど見えない力が集まり想いを具現化させることが出来る。その根源を我らは魂と呼んだり精霊と呼んだりした。すべては円環の中で循環し物事の良しも悪しも混ざり合ってしまう。生まれては朽ち、生まれては朽ちの繰り返し。それが力だ」

そういうと老人はパイプを咥え、煙を吐いた。

「旅人よ、運命の声に耳を傾けなさい。運命の声に耳を傾けることが出来るものは、正しい選択ができる。だが、お前が病み、穢れた時は運命の声に耳を傾けることが出来ない、傾けられたとしても聞き間違えてしまう。ここにお前がいるという事は、運命の声に耳を傾けた結果だ。私は今、お前を客人として受け入れよう。ついてきなさい」

通されたのは、土で出来たドーム状の小さな小屋だった。中は光がほとんど入らず暗かった。床一面に葉草が敷き詰められ、馨しい香りと共にとてもない熱気が体にまとわりつく。中央に火がくべられ、木と共に葉草が燃やされていた。その周囲を囲むように石が置かれている。

部屋の中はいわゆる蒸し風呂になっていた。

「汗ですべてを洗い流せ、そして熱から発せられる煙を身体中に擦り込め」

そういうと老人は薄暗い中裸になり火がくべられたそばで胡坐をかいた。

俺もそれを真似するように服を脱ぎ胡坐をかく。

老人は呪文のようなものを詠唱しながら水を焼けた石にかけた。石にかかった水は蒸発し、水蒸気となる床一面に敷かれた葉草の香りが部屋中に立ち上ってくる。

俺は目を閉じ、滝のように汗を流しながらじっと老人の詠唱に耳を傾けた。

休憩が何度かあり、それが終わるとまた蒸し風呂の中に戻される。何度も繰り返していると暑さで意識が朦朧とする。

さすがに意識を失いそうだったので、老人に限界の意を伝えた。

「それでいい、もう少しの我慢だ。しばらくすれば自然と夢の方がお前に語りかけてくる」

ぼんやりとしてきた。目の焦点が合わない。何を考えているのかもよくわからない。頭の中がこんがらがって何かが駆け巡ってくる。息が荒くなり、何も感じなくなってきた。時間の感覚がなくなり、すべての感情が消えうせた。

目が覚めた後、目覚める前に見た夢について話した。

夢と言っても断片的で、色だったり、言葉で形容しづらいことも混じっている。俺は、試行錯誤しながら、どうにか感じたことを言葉にした。

老人はそれを聞くとこういった。

「夢は未来を教えてくれる。夢のお告げは断片となつて現れる」

「それで？」

「お前の見た夢を繋ぎあわせると。お前の身の回りにある、すべての物は、一度お前から切り離されると出てい

る。いいことも、悪いこともすべて。だが、お前はそこで終わることはないだろう。聖なる火が消えることが無い様に。苦しみに耐えよ。すべてが切り離されたが故に高貴なものになれるのだ。だがお前はその力さえあえて皆に分け与え人を導くだろう」老人は間を置いて、「私が言えるのはここまでだ、お前の夢を私は見れん。後は自分で夢で見たことを理解するのだ」と老人は言った。

俺は「わかりました」と答えた。

その返答に老人は「憐れ^{あわ}みたまえ、すべての物事は運命の糸で繋がっているのだ」とつぶやいた。

その後、老人のもとを去り、俺は自分の家に戻った。

抽象的な老人の解釈と日に日に薄れていく夢の内容を思い出しながら、自分が見た夢の意味を考えながら過ごした。

でも、結局わからなかったので考えるのをやめた。

こういうのは考えても無駄な類^{たぐい}の物の気がする。

しばらく留守にしている間にミハイルから手紙が来ていた。

久しぶりに今度二人で会わないか？ という内容だった。

俺は急いで連絡を入れた。

指定された場所は小さな街のとあるホテルのロビー。俺じゃ考え付かないような待ち合わせ場所だった。

深く椅子に腰掛ける。

備え付けの新聞を手に取り、時間を潰す。

しばらくすると新聞の下の方に目を向けていると、人の足が見えた。

顔を上げた。

沈黙。

「……久しぶりだな」ミハイルは言った。表情は幾分やわらかい。

「ああ」新聞を折りたたみにやりと笑って俺は答えた。

「どういう風の吹き回しだ？」

挨拶はそれだけだった。

そして、俺とミハイルは再会した。

第三章

CHAPTER 3

私

たちに召集令状が来たのはそれからすぐの事だった。

そこそこ上質な用紙に飾り文字。定型文のすぐ

下に、名前がタイプされていた。

別に期待したわけじゃないけどすぐあつてなかった。今思えば、数日前にあった、学舎の全員が受けた試験が適性検査だったのだろう。

大半の人間が取り乱すことも無くその通知を受け入れていた。この学舎来るような人たちは、理解力だけは優れていたし、皆、心のどこかで覚悟はしていたのだ。それを受け入れられないような人間は、沈没しそうな船に住む鼠ねずみのように、既に学舎から去っている。そういうものだ。

そして私たちに告げられたのは、身辺整理と次の連絡が来るまで待機。の二つだけだった。

大義のために死ぬつもりはさらさらないが。だからといって家に戻りたいとも思わなかった。どっちがマシか程度だが私は戦場に行く方を選んだ。

その一週間後、私たちは数日中に、訓練所へ行くという事が通知された。

私はレーニヤの研究室の整理を手伝っていた。

自分の身のまわりの整理は大体終わっていたがレーニヤは違った。

学生にしては持ちの物量が多すぎるのである。おまけに研究室持ちのご身分である。一介いっかいの学生が自分の研究室を持つのも異常なことであるのだが、彼女はその対価に見合うだけの成果を残していることも確かである。学会の専門誌に名前が載っているのは珍しくないし、論文の引用も多用されている。そういう意味では未恐ろすえおそしいくらいでありやしない。

そして私は、そんな彼女が気を許している人間の一人である。有難いのは有難いが、そのせいでいくらか気苦勞もある。

レーニヤを敬愛している人間たちから露骨ろこつに嫉妬しつとされたり嫌がらせを喰らうのだ。こつちも攻撃のかわし方や蹴散らし方を覚えたので、そうそうトラブルにはならないが定期的に回避できない突発的な事もある。

だが、レーニヤはなんだかんだ言っても私を頼りにしてくれる。周りが思っている以上には関係は上手くいつている感じだ。

研究室の片づけはまず初めにいるものにならないものを分けた。

レーニヤの弁によれば、私がい方が、モノを捨てるときに悩まずに要不要の判断が付きやすいらしい。実際大きなものは私が「これいる？ いらない？」の二択を私がして、レーニヤが答え、そのあとゴミ袋やゴミ箱に突っ込んでいく形の作業になった。

おかげで予定よりも早く済んだ。

その後は、レーニヤが大切にしていたお酒の処分である。

「全部無駄になっちゃった」私に背を向けて、また新しく開けたばかりのお酒を流していた。

流し台の上には割れた瓶や、潰けていた薬酒の中身が残ったままの瓶が散乱している。流しは色々な匂いが混ざって酷いことになっていた。

レーニヤは大切に保存していた飲料用の酒を一杯分飲んで、残りの中身を流しに捨て、また一杯飲んで流しに捨てるの繰り返し。棚に入っている殆んどは、実験用のアルコール類や魔術で使う薬酒だが、いくつか飲む為に高いお酒を紛れ込ませて楽しんでいたらしい。年齢的

に飲酒はあまり褒められたことではないが、アルコール自体は実際に実験や研究に必要なものであるから入手は難しくない。

「もったいない……」そう私はつぶやいた。レーニヤが自分で購入したものとはいえ、この処分の仕方は贅沢でありながら贅沢とは到底思えない所業だ。

「どうせ、戻れるかもわからないし、保存しておいたのを見知らぬ誰かに飲まれるのも癪だしね。薬酒なら戻ってこれたらまた漬けなおせばいい」レーニヤは振り向いて私に言う。

「それはそれで大変よ」

「そんなにたいしたことじゃない」そう言うレーニヤは「何か飲む？」と、小さなグラスを私によこした。

「お酒は飲まないことにしてるの」

レーニヤはその足で研究室に常備されている小さな冷蔵庫を開けて「お酒以外にもいろいろある」

冷蔵庫の中にはビン入りのソーダやトニックといった割り材やアストラーニエ外からの輸入物のコーラやら、オレンジソーダが入っていた。

その中で奇妙な形をした青緑色のくびれのある瓶が目

に入った。ガラス玉で栓がされている。

「お目が高いわね」

「なにこれ？」

「ラムネ。炭酸入りのレモネードが入ってる。全部がガラスで出来たビンを作っている所も今、ほとんどないのよ。だから、消えていくのを待つだけ。なんだか——ごめん。なんでもない」

レーニヤはそれ以上は言おうとせずに口をつぐんでしまった。悲観的にとらえているらしい。

ただ、一瞬ふと見せた悲しげなその表情が、とてもきれいだと思った。

「これで開けて」

おもちゃの車輪みたいな形の木製のカップの様なものを渡された。良く見てみると中央の部分だけ突き出ている

「この出っ張っている所でガラス玉を押し出すの」

「ありがとう」

受け取った木製のカップのような器具をビンに被せ掌を使って押し出した。

ガラス玉がビンの中に落ち、一気に炭酸の気泡が湧い

た。しばらくすると発泡も落ち着いて、ビンを空ける器具を外した。

「それじゃ乾杯」

レーニヤは自分のグラスをグラスを私のレモネードの入ったビンにぶつけた。

ガラスで出来たビンの飲み口は冬のこの季節に飲むには冷たすぎた。二、三口ほど口に含んでからビンの中の泡を眺めていた。

「これから戦場に送られることをどう思ってる？」突然レーニヤは聞いてきた。

私はと言うと、実感が湧かないというかよくわからなかった。私にとっては日々の流れの一つとしてしか認識できていないと言った方が正しいかもしれない。だから、こう答えた。

「力を持つてしまったものは、必要なときにその力を使う責任がある。私はそう思うけど？」

レーニヤは答えに納得していないのか「誰のために？」と聞いてきた。

「それは……必要とする人の為」

「必要とするって言ったって、悪事を働くために必要

だったらどうする？」

しばらく返す言葉が浮かばなかった。下手に反論すると理屈っぽい畳みかけを喰らいそうだったし、余計なことをいって議論をする気は起きなかった。

「……いじわる」小さな子供が悪戯好きの大人を非難するように私は言った。

「冗談よ」

「ねえ？」

「今度は何——」私は、レーニヤの方を向いた。

彼女が私を見つめる曇りのない真剣な目は、私の動きを止めるのに十分だった。

唇を重ねてきた。

柔らかい感触。

口の中で感じるアルコール独特の苦み。

私はその行為をただ受け入れるしかできなかった。

唇が離れる。

そしてわずかな沈黙の後、ぼつが悪そうにレーニヤは口を開いた。

「ごめん。酔っぱらってるみたい」そう言ったレーニヤは、どこか冷たい目をしていた。

酔っぱらっていたというのは言い訳で、レーニャは
案外冷静に行動していたんじゃないだろうか？ 自分の
した行為に恐怖しているのだろうか？ それとも別の何
かが頭の中を駆け巡っている？ 私は頭の中で自分の想
像力が、連鎖反応を起こしているのを感じていた。

なのに私は「気にしてない。大丈夫」といった。

ただ、心臓の鼓動がなかなか収まらない。

私の目の前にいる人間の存在、体温、感情そういった
ものを共有したい気持ち^{あふ}が溢れてくる。

「ねえもう一度してもいい？」私はレーニャに向かって
いった。

返答を聞く前に、今度は私の方からキスをした。

「これでおあいこ」

レーニャは「ふっ」と微笑んだ。一瞬の表情が今はな
ぜかとても愛おしかった。

第四章

CHAPTER 4

俺

とミハイルは、ロビーで軽く談笑した後、レストランでワイン片手に食事を楽しむことにした。向かい合いながらワインを酌み交わす様子はハタから見たら、久しぶりの再会を喜ぶ友人同士の微笑ましい飲談（かんだん）に見えるだろう。

食事は中々のモノだった。

ピクルスの盛り合わせと新鮮な葉物野菜のサラダ。

香辛料の効いた魚のスープ。

鴨肉のロースト……。

それらはどこにでもある何の変哲もないメニュー。普段のお粗末な食事と比べれば、何でも美味しく感じるのには確かだが、それでもここまで充足感（じゆうそくかん）を覚えないだろう。素材がいいのか調理法がいいのかはわからないが、食事の美味（うま）さも相まって話が弾んだ。

最初はくだらない世間話。

次に近況報告。

そして、腹の探り合い。

ミハイルは端正な顔立ちな上、人づきあいに慣れている故に表情が読みづらい。ミハイルの表情を意識しつつ、会話をして意図を探った。

ミハイルの方も勿体ぶっているわけではないが、話にもどかしさを感じる。俺と同じで物事の美味しい所は最後に取っておく主義らしい。

肉料理をフォークで刺して口に持っていく。

飲み込んでから、グラスの中のワインを傾ける。

一息ついて俺は聞いた。

「それで、一体何の用なんだ？ 久しぶりの再会を祝って一緒に食事して終わりってわけじゃないだろ？」

ミハイルは数秒、間をおいてからわざとらしくニヤリとして「期待しているのかい？」

「そういうジョークは止める、シャレになってない。お前みたいなやつが、ただ何となくで会うなんてありえないだろ。何を考えてる」

俺がわかるのは、この話はガラの悪い飲み屋でやるような話じゃない。という事だけ。

ミハイルはナイフとフォークを置くと「失礼」と言っ

てナプキンで口元を拭いた。

「まあ、なんだ。簡単に言うただな……相談なんだが……俺と一緒に仕事をしないか？」

「冗談だろ？」

「俺が嘘言ったことあるか？ それに、もう事務所も用意してある」

「その話に乗ってもいいが、一体何するつもりだ？ また使い魔関係か？」俺は、水の入ったグラスに口をつけた。「あまり汚れ仕事はしたくない」

「そこら辺は心配しなくていい。多分、数か月は給料が出ない」ミハイルは言った。

「事務所があっても仕事がないってことか」

「いわずもがな。別の言葉で言えば開店休業状態」

「お前の事だから勝算かなにかはあるんだろ？ こそこそ裏で何やってたかは聞かないが」

「そんなものはない。直感だけさ」ミハイルは言い切った。

「そうか。俺はお前の話に頷くのは簡単だ。既に泥の中に体を突っ込んでるんだ、ただ、これ以上やると洗濯機ぶち込んでも汚れは落とせないかもしれない気がするんだ。つまり最終的にゴミ箱行き……俺の言いたいことは解るな？」

「無理にとは言わない。俺だって悪人じゃない」

「綺麗な顔して、首の下まで泥の中にいるような奴が言

「綺麗な顔して、首の下まで泥の中にいるような奴が言

う台詞か？ どっちにしろ、普段の使い魔の下請け的な非正規仕事は俺たちには分が悪い。それに俺は組織に所属しているわけでもない」

「俺だって、協会にも組合にも忠誠心は持っていない。俺らからすればどっちも変わらないわけだしな」

「とはいえ、この仕事をするだけの目的はあるんだろ？」

それ以上の事を探ろうとするとミハイルは言葉を濁した。本音は話してくれないらしい。

「まあ、乗るも反るも、契約書を作って、内容を詰めてからだ。それにまだデザートも食後のコーヒも飲んでない」と俺は言った。

「わかったよ、カルナ。この話はまた別の機会にしよう」
ミハイルは仕方がないなどと言う様に笑っていた。

第五章

CHAPTER 5

貨

物列車のような長く連なった列車に押しこめられ、私たちは訓練所に連れて行かれることになった。

貨物用の長距離路線を使い家畜のように運ばれる。

私たちの価値は家畜か荷物と同じらしかった。貨物車両で運ばれなかっただけでも幸いと思った方がいいのだろう。

座席のシートは寝台車用のベッド変形するタイプのもので、硬い材質出来ていて何時間も乗っていたら、お尻が真っ平らになるんじゃないかとさえ思える。これを好むのは苦痛とか、気が滅入ることや拷問が大好きな変態か何かくらいだろう。

隣では何を考えているのか知らないが、レーニヤは、物憂げに窓の外を眺めていた。

お節介せっかいになるのが嫌で私はあえて話しかけなかった。長い間列車に揺られることになるんだから少なくとも話す時間が足りなくなることはない。

用を足しに洗面所に行くときなど席を離れることもできるから、そのついでに車内を見て回ることもできたし、退屈だと思えば、他の席にお邪魔することだってできた。特定のグループに属さないようなタイプの子たちが、実

際暇を持て余して入れ代わり立ち代わり、気さくに話しかけてきたりもする。そういう子たちは話し相手が欲しいだけで、自己紹介もしたり、しなかったりと性格的に後腐れが無いので、受け流すにしても話し込むにしてもやりやすかった。

おかげで普段の学舎では、付き合いのないような子たちとも沢山おしゃべりをするようになった。学舎内の利害関係も、今回の招集で大半が消滅したと言うのも大きいだろう。

今まで、縛られたしがらみが至る所でリセットされているのだ。

同じ車両の中でも旅行気分でカードゲームやお菓子を食べながら女の子同士おしゃべりに花を咲かせる子がいるとおもえば、小難しそうな本を退屈そうに読んでいたりする子もいる。中には仲のいい友達に膝枕させて、昼寝をしている者もいた。膝枕ひざまくらさせている方もまんざらでもない表情なので、もしかしたらカップルなのかもしれない。

思った以上に学舎の生徒はいろいろな人間がいるようだった。どこか、異国の奇妙な動物が集まった動物園の

中にもぐりこんだ気分だ。

みな三者三様というか、それぞれが気の遠くなるような長い道のりを様々な方法で過ごしている。

一応書類上は組合所属の魔法少女とはなっているが、正式に所属しているという感じではなかったし、まだ実感と言うものが無かった。目に余る態度の人間もいないわけではなかったが、それをうるさく注意をする者もいなかった。

それに大半は節度を守っていたので大きなトラブルは起きることはなかった。

夜も更けてくると、車内は人氣が消えたように静かになった。消灯時間のちよつと前に席をベッドに作り替えた。

座席は簡易的な二段ベッドに変わり、ベッドメイキングが終わると、後は寝るだけだった。

上の寝台が私、下の寝台がレーニヤが寝ることになった。

消灯後もところどころで、時々人の動く音も聞こえた。

が気になるほどではない。ド派手なパジャマパーティーが湧き起こることも無く。列車の揺れる音だけが響いていた。

しばらくすると、下のベッドから私を呼ぶ声がした。

「どうしたの？」

「ねえ、アリサ。つまらないお願いなんだけどさ、しばらくの間……そばにいてくれない？」

私は少し間を置いて。

「うん」と頷いて「いいよ」と言った。

レーニャは気弱なただの女の子のように思えた。普段しっかりした性格のレーニャが見せることのないその表情がどこか新鮮で、いとおしく思えた。

すぐに私はレーニャのベッドにもぐりこんだ。

寝台車のベッドは狭くて、そばにいただけでレーニャの体温を感じた。自分のすぐ隣レーニャがいるのがとても嬉しかった。

そして、眠りにつく直前まで何を話したか思い出せないくらいおしゃべりをして、一緒のベッドで眠った。明日になれば、私たちは訓練所に着くことになる。明日からは今までのようにはいかないはずだ。

訓練所はそこその規模の地方都市の外れにあった。

そこで、六か月ほど基本的な知識と技能を叩きこまれて、戦場へ派遣されることになる手筈だ。

まず初めに訓練服と訓練で使う装備一式が与えられた。

そのあと、

所属

階級

といったものがあたえられ、最後にコードネームを決めることになった。

本来の魔法少女契約よりかなり簡略化されている。

有事の為、仕方のないことなのだろう。

訓練所は組合のモノだったから、組合所属、階級は魔法少女となる。

コードネームは名前とは別に様々な活動や、識別のために必要となる。使う場面はほとんどないのだが、管理上あると楽なのだそう。それについては私は賛同することはできないが、上の方では本当にそう考えているら

しい。

レーニヤの場合、クラースナイ・ヴエヂマ^{紅い魔女}と言う通り名がそのままコードネームとなった。コードネームにヴエヂマ Babas^{ババ}と言う文字が入っている。彼女のルーツであるロシアの言葉で魔女と言う意味だ『魔女』魔法少女の位でコードネームで魔女を名乗るといいうのは普通じゃ有り得ないことだ。

成人の際、ふつうなら階級は魔法使いとなる。魔法少女の位の後、すぐに魔女として扱われるには、ある一定の学位と、資格を所持していないといけない。コードネームに『魔女』という意味の言葉が入っているという事は彼女は後に魔女になれる権利を約束されているという事だ。

私は、通り名などは持つていなかったので、コードネームを作ることもなかった。

さすがに、古風で東洋的な名前はエキゾチックを通り過ぎて意味不明にしか思われないし、

魔術・魔法に対する考え方の違いもあるので、変に東洋風にしてしまうのは混乱や様々なトラブルが発生する。ここでの許されるエキゾチックはレーニヤのロシア

語やラテン語と言ったレベルまでだ。

様々なルーツを持つアストラニーエでも、東洋の血を引く私は、この訓練所のコミュニティのなかでは特にマイノリティな立場だ。

それにここは個性が尊重されるような環境でもないし、どうせ通るわけがないので、蒼き幽霊という意味の Fantôme bleu^{ブルーファントム}にすることにした。深い意味はない。フランス語なら通りがいいだろうというくらいだ。少し奇妙な気もするが、何か問題が起こったら改名すればいい。そして、今、ここに魔法少女としての私が生まれたのだ。

第六章

CHAPTER 6

シン
ヤツとズボンをまくり上げると、俺はケバケバしい箱に入ったあっちの世界からの輸入されたの粉末洗剤を床に振りまいた。デッキブラシをリノリウムの床に勢いよくこすり付ける。汚れがひどいのか、洗剤は泡立つどころか水と汚れが混ざり灰色の液体に変化するだけだった。

「なあ、こういうのって密輸になるのか？」

俺は、洗剤の箱をわざとらしく振りながらミハイルに聞いた。

「さあ？ 正規の手続き以前に表向きは、アストララーニエとは一切交流がないってことになってるし。大義の上ではこれは存在しない。それ以前に、政府自体が何も考えてないだろ」

「うるさくなるとしたら、何かしら外交問題が起こってからか」

「俺たちにはどうすることもできないんだし、考えるだけ無駄だ」

「だよな」

また床をこすり始めた。

ここ最近、アストララーニエ製の工業製品が社会情勢

が悪化しているために市場に回らなくなってしまった。

おかげでまともなモノが正規の値段で手に入らない。とはいえ、モノが全然ないわけではない。どんなルートがあるのか知らないが、アストラニーエの外の世界からの輸入品が市場に回ってくるようになった。

無論、値段は輸入品という事もあるが、最近はそのに加えどの店も法外な値段を吹っ掛けていている。物価も、日に日に右肩上がりだ。

おかげで、俺も床に洗剤を振りまく行為に罪悪感を覚えることになった。

ミハイルに初めてつれてきてもらった時の事務所は悲惨なものだった。

小さなオフィスビルの三階。

賃料が払えなくなった業者から。内装・設備含めて、そのまま丸ごと引き取ったそう。前の所有者の荷物は処分されてなく、書類やら何やらが至る所に散らばり、部屋中に埃がたまっていた。きつと『掃除するつもり』のまま、何年も放置されていたのだろう。

おまけに、床を歩くと、黒い小さな虫が一斉に動き出す。前の持ち主は掃除という概念が無かったらしい。至る所にありえないような汚れがこびりついている。洗面所にかけていたタオルは黒ずみ、カビまで生えていた。

部屋の中は全てにおいて敬意が払われていなかった。俺も部屋に魔術資料やら古いガラクタを溜め込むが、こんなベタベタするような汚さではない。度を越えている。

「まあ、どこもこんな感じだよ。値段相応、おあつらえ向きな部屋ってとこだ」

デザインの酷さと、経年のくたびれに目をつぶれば机や、応接用のソファもあり、時間をかけて綺麗にすれば職場の見た目は様になるのは確かだった。

安物買いの銭失いな気もするが、金がないのだから文句は言えないのだろう。

「発掘調査にはもってこいだな」

「掃除ついでにこのガラクタの中を宝探しが出来る。おまけにここにいれば雨風がしのげる、素晴らしいことじゃないか」

「うれしくて涙が出るな」

口から出てくるのは皮肉めいた言葉

「まあ、ここじゃハッピーな気分を装わないとおかしくなる」

「確かに」

本当にひどすぎて逆に笑うしかなかった。

汚れを雑巾ぞうきんに吸わせていると、外で激しく大きな爆発音が響いた。しばらくして小さな衝撃波が部屋に伝わり、まだ掃除していない場所からの埃ほこりが部屋に舞った。

二人とも体をびくっと震わせ、物陰に隠れた。急いで窓の方を覗いたが外の様子は見えなかった。

「一体なんだったんだろうな？」俺は言った

「音からすると魔法だろうな。多分、最近流行の魔法少女の抗争かもな」

「ここいらも、色々とヤバくなってきたな」

「最近は何処も同じだ。俺たちもしばらくは仕事には困らなくなる」

「相変わらず考えがエゲツ無いな、死んだら元も子もな

い」

「それなら死ななければいい。それに、誰かがやらなきゃ汚れ仕事は無くならないさ」

ミハイルは微笑った。自信があるというか、なんというか嗅げごとの様なものに対する勝算の様なものがある、そんな感じの雰囲気と言葉の端々から、かんじよれた。

俺にはミハイルが、なんとなくこの先の行く末を知っているんじゃないかとさえ思えてきた。

第七章

CHAPTER 7

訓

練所ではマジカルステッキの使い方から、実践訓練までありとあらゆることを一通り教わった。得手不得手は関係なかった。誰でも一通りできるようになることが目的だった。

訓練はかなり厳しいもので、実践訓練となると気を張っていないと命にかかわる。おまけに攻撃魔術やマジカルステッキでの格闘しなくてはならなかった。実際に市街地で市街戦の訓練もやった。連隊を組んだ時と個人行動の場合の両方の場合を想定したため指導官も容赦がなかった。

大切なのは非情になれるか。そして、どうやって他人を欺くか。優雅になんて言っていられないのだ。

もはや魔法少女に礼儀は必要ない。

敵でも利用価値があれば生かすし、自分に危害を加えるようなら仲間でも殺す。事を難しく考えては駄目なのだ。直感による選択が明暗を左右する。

結局最後に頼れるのは自分自身だ。

ハードな戦闘訓練でそういったことを全身に叩き込まれた。

訓練をしていると色々なことがどうでもよくなってい

く。目の前の事が精いっぱい余計なことを考えなくなるのだ。それは人間関係でも同じで、疲労困憊ひろうこんぱいで他人の事を気にしている余裕はない。

全体訓練のカリキュラムが済むと、同期の部隊はいくつかの小隊に分けられ、訓練はその小隊で行われることになった。全体訓練の成績や、得手不得手で区分けされたようだった。

私の配属された小隊のカリキュラムには通信部隊の科目が多かった。殆どが、味方の暗号化された魔術通信ほうじゆを、解読してタイプし直すことだったが、中には通信傍受ほうじゆの技術や特殊な魔術の解読法といった、一定のスキルが必要なものもあった。ただ、私にとって暗号解読は言葉遊びのようなもので自分の専門分野の応用が利くので、楽に出来ることだったし好きだったのだが、周りはそうでもないようだった。

講義が始まるまで講義室で、暇つぶしを兼ねて、ちょっとひねった暗号を解く。訓練と訓練の合間の自由時間は一人で過ごす方が多かった。

人づきあいは嫌いじゃないが徒党とどうを組むのは気を使うのでそんなに好きではないし、面倒くさい。単独行動の方が性に合っていた。

「ねえ、ちょっとやってもいい？」突然、切れ長の目のかわいらしい女の子が話しかけてきた。

「解ける？ 結構難しいけど、これ」私は意地悪そうに言ってみた。

それを見て笑いながらペンを走らす。

「どう？」

「合ってる」

にこりと笑って、

「どう？ すごいでしょ」満面の笑みを見せた。

すごく人懐っこい子だった。

「なかなかね」

「まだ時間あるし、何か話そうよ。少しは楽しいことしないかね」

彼女はシジレと名乗った。本名はシジレスレンと言うらしいが、長つたらしいのでみんなシジレと読んでいるらしい。透き通る白い肌だが、髪の毛は黒くどことなく東洋風の顔立ちで、よくよく後で聞いてみるとルーツに

ロシア系とモンゴル系の血が入っているそうだ。

彼女は暗号解読の能力が特別優れているわけではないが、器用で臨機応変に対応できる応用力が優れていた。

センスがいいという奴だ。魔法の通じない場所でも五種類ほど言語の基本的な読み書き会話が出来るそうで、暗号解読が得意なのは、多分その所為^{せゐ}だろうというのが彼女の弁だ。ただ、全部中途半端にしか出来ないそうで、高度な文章はお手上げらしい。

誰とでも仲良くなれる才能があるようで、小隊内でもすぐに人気者になった。シジレと言うあだ名も遠くでも聞き取りやすいし、発音しやすいという理由で、シチレーへと変化していった。

彼女は人気者なので様々なグループのお誘いが多いのに、事あるごとに時間を見つけては一緒に行動してくれた。彼女のおかげで、小隊のメンバーとも良い関係を保てるようになった。

休日の日は外出許可が与えられる。一応、組織所属の魔法少女という事で給料も出た。

街に出ると組合の福利厚生施設がいくつかあり中には劇場やサロン、運動場などもあり娯楽にはさほど困らなかった。

数週間ぶりに私はサロンでレーニヤと再会した。レーニヤは私に、

「最近どう？」と挨拶代わりに聞いてきた。

「どう？　といわれても……まあまあかな」私は上手く答えられなかった。

レーニヤは別部隊に配属されてしまっていたので、会う機会も少なくなっていたせいで、会話にぎこちなさと言うか居心地の悪さが感じられた。色々昔の様には上手くいかない。

「私の方も良くもないし、悪くもない」

「そう」

何を言ったらいいんだろう。適当な言葉が見つからなかった。サロンの二階の吹き抜け部分に寄りかかっているホールを見下ろしながら、しばらくの間たいして中身の無い話をして、調子が戻るのを待っていた。

「アリサあ！」後ろの方から、シチレーの声がした。しばらくして、近づいてくる人影が見えた。

「シチレー？」

「奇遇だね、アリサもここにいたんだ。この人は？」

「レーニヤ、学舎のルームメイトだったの」私はシチレーにレーニヤを紹介すると、今度は「この子はシチレー。私と同じ小隊に所属してる」とレーニヤにもシチレーを紹介した。

二人の挨拶と自己紹介がおわると、私たちは一つのテーブルを囲い、コーヒ一片手に他愛のないおしゃべりをした。

レーニヤとシチレーは、出身地が近いらしくその話して盛り上がっていた。シチレーと話すレーニヤは、良く笑って楽しそうだった。久しぶりに笑うレーニヤを見た気がする。

そのあとも色々と三人で話をして会話を楽しんだ。

そのうちシチレーは、また別の友人を見つけて、一旦席を外し、そっちの方へ行ってしまった。

元々、特定の誰かとずっと話し込むような空間ではなかったし、みんな飲み物片手に席を移動して情報交換なんかをしていたから。別におかしなことではなかった。

「いっちゃったね」

「なんか変なかんじだね」私は微笑いながらいった。

どこかに取り残された感じで、奇妙な喪失感があった。それはレーニヤも一緒だったようだ。パーティーが終わって、みんなが家路につくような寂しさに似ていた。ほとんど残っていないコーヒに口をつけていると、

「ねえ、別の場所に行かない？」レーニヤが聞いてきた。「どこへ？」

「もっと静かなところ。飲めるところも、時間を潰せるところもいくつか知ってる」

少しの間をおいて、

「いいよ」と私は頷いた。

レーニヤと一緒に外に出て、家出をする少女のように静かにサロンの扉をしめた。その日は私は時間が許す限り、レーニヤと一緒にいることにした。

第八章

CHAPTER 8

その日は空の様子だけ見れば、何の変哲もない穏やかな一日だっただろう。日々涼しくなってきたのは、陽気はまだ温かい。

戒厳令はアストラ―ニエー帯に通知され始め、悪いニュースがポツポツ新聞紙面を賑わせはじめていたが、自分の住んでいる場所が戦場になるなんて思ってもいなかったし、非日常的な別世界の出来事のように感じていた。

俺が住んでいる北東部の区画でも小競り合いはあったが、組織抗争レベルで戦闘と言うほどではなかった。ふと、こすれるような妙な音に気付いて空を見上げると空に一筋の線が走っていた。何かが高速で飛んでいる。

突然、道に亀裂が走った。

沈黙

間を置いてから、圧縮された空気が通り抜けた。

堰を切ったように、轟音が湧き起こる。

騒音の中で、誰かの「逃げる！」という叫び声が耳に入ってきた。

その叫び声のすぐ後で連続する爆撃音。

マジカルステッキに跨った魔法少女が大通りを通り抜けていった、それを追いかける数名の魔法少女。一瞬で市街地は戦場へ様変わりしていた。

砂埃が舞い上がる。何も見えない。

建物の陰に隠れ、コートえりの襟を立て戦闘が治まるのを待った。

その後、戦闘は収まり、どうにか日も傾き始めたころに自分の家に戻ることが出来た。ドアを開けると、妙な胸騒ぎがした。中に入ると部屋が荒らされた形跡があった。見たところまだそんなに時間はたっていないようだ。息を殺してゆっくりと進む。

物音がする。奥の方からだ。コスチュームとステッキを持った少女が、本棚の本を一冊一冊、風潰しらみつぶしのようにパラパラとめくっては床に放り投げている。

俺は気づかれないように物陰に隠れ「誰だ！」と声を張った。

「やあ、初めまして。カルナさん。そんなに警戒しないでくれ。悪いようにはしない。僕はただ、話を聞きたい

んだ。君が何をしているのかをね」

淡々とした話し方だった。どこか少年っぽい話し方で、いかんともしがたい冷酷な感じがした。

俺は無抵抗の振りをして、あきらめにも似た笑顔を見せながら、普段からコートのポケットに潜ませていつ呪符をだし、封印記号を破った。一言、「答えはこうだ」と言つて。

閃光。

少女は息絶えていた。

「悪いな、勝手に人さまのモノを漁るデリカシーのない女は嫌いなんだ」そういうと、安心したせいか、思いつきり息を吐いた。

俺は、何かわかるかもしれないと思い、少女の身体をくまなく調べた。死体はまだ温かいが、少しずつ体温が無くなってきたのがわかる。マジカルステッキの個人情報
は特段めずらしいものではなかった。

そのまま何するでもなく少女の亡骸をじっと見つめていた。感じたのは、人を殺してしまった罪悪感ではなく、死体に対する嫌悪感だった。

目の前の死体をどうすべきか判らなかった。

放っておいたら、数日以内に異臭を発してしまうだろう。外に捨てるわけにもいかない。マジカルステッキ自体は破壊されていないので、誰かしらがもしかしたら死体を回収に来るだろう。

どっちにしても長居は出来ない。それに死体を愛でて楽しむ趣味もない。俺はそそくさと荷物をまとめ、ここから離れる準備をした。

ここにいっても、命が危ないだけだ。

いろいろ集めた魔術資料が惜しかったが、『形あるものいつかは朽ち果てる』という、どこかで聞いた言葉を思い出しながら、本当に大切なものを少し選んであとと置いていく。

どうせ死んだら、頭の中身だつてきつと、あの世にだつて持っていけない。余計なことを考えるのはやめにした。大きな戦闘は起こっていない。少し休んで様子を見ながら街から抜け出すことにした。

外は戦闘のせいで、建物の外壁にはたくさんの穴が開き。至る所で煙が待っていた。

焦げ臭い匂いと、排泄物に強烈な周期物を混ぜたような、何とも形容しがたい腐敗臭。

至る所で亡骸^{なきがら}が放置されたままなのだろう。こんな状況じゃ死者に敬意を払う訳にもいかない。

ほんの数日前まで、生活感の溢^{あふ}れていた街も今では、息を殺したかのようにひっそりしている。

隠れられるように建物や物陰のそばを歩きながら、郊外へ抜ける道を歩く。いくら非戦闘員だからって、追いつめられた魔法少女から見れば、敵にしか見えない。ここ数日の戦闘で彼女たちの精神がおかしくなっていれば、そのリスクはさらに上がる。

こんな時に常識は通用しない。

いつも通っている道を歩くだけで心拍数が上がる。たまったもんじじゃない。目立たないようにこそそそ歩く方が悪目立ちするのは頭の中ではわかっていても実際は到底無理だ。

全方位に意識を集中させながら、なるべく早くこの街から離れようと歩いた。

空に二つの筋がみえた。

ほんの数ブロック先で爆発が起こった。衝撃波^がが

すった建物はえぐれている。

建物に残っていた住民も叫び声をあげて着の身着のまゝ、走り出す。これ以上崩れることはほばないくらい崩れた建物の近くでうずくまる。

待った。ただひたすら何もしないでじっとして、戦闘が収まるのを長い時間。

何度も繰り返される破裂音。舞い上がる埃のせいで、口の中は粉っぽかったし鼻の穴は乾いたようななんとも言えない不快感が残っていた。

どれくらい経ったのだろう、周囲が落ち着いたのを確認したときには時間の感覚が無くなっていた。

街の様相は、更に酷くなっていた。

瓦礫がれきの中で、何かが動いた。

瓦礫の塊に近づき耳を近づける。何も聞こえない。俺は建物の外壁やら木片やら、様々な瓦礫を動かした。しばらくすると、人間の姿が見えた。建物の下敷きになっ

ているらしく、動けないようだ。

反応はない。

俺は急いで人影に覆いかぶさっている瓦礫をどかせるだけどかし、取り除いた。

そこには女の子とそれを抱きしめている男性がうずくまっていた。

男の方は身体は温かいが、顔からすでに血の気が失せ、すでに息は無かった。全身でこの子を守っているうちに力尽きたようだ。

女の子の方はまだ息があつた。意識もあるらしく、俺の問いかけに頷いた。俺は来ていたコートを少女にかけた。ただ、彼女の方も傷だらけでかなり出血しているようで、かなり具合がわるそうだ。

この子の父親が守った命だ、無駄には出来ない。

「大丈夫か？」

少女はこくと頷いた。

「よかった。ひとまずここから離れよう」

俺は少女を胸に抱きかかえるようにして、その場を離れた。

行先は考えていなかったが、今の状態だと遠くに逃げるわけにもいかない。距離的にもミハイルの小汚い事務

所に身を寄せるのが安全だろう。

今は何よりも、この子を助ける事が先決だ。それ以上の事は頭に浮かばなかった。